
オーラに見える教室

MISA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーラの見える教室

【Nコード】

N0726M

【作者名】

MISA

【あらすじ】

この世のすべてにまわりつくオーラ。それをいとしてみることが出来る千賀。そしてオーラがない少年たちに千賀はある言葉を投げかける。

私は人のオーラが見える。

正確には人だけではなく、この世の万物に対してすべて、例外なしにオーラが見える。

そんな変わった体質を持つ私。佐藤千賀さいとうちかは高校生にこの春なっただけだ。

昔はオーラが見えるというと、気味悪がられる意味が分からず、友達を作ることができなかった。

しかし、成長とともに学習した。

言わなければいい

なぜそんな簡単なことに気が付かなかったんだろう。

そろそろ暑くなりはじめ、雨が降ると服がべっとりとまとわりつくようになった季節だった。

用事があつて学校に残っていた千賀は誰もいない廊下を歩いていた。

ふと横を見ると、部活動をしている野球部が見えた。

立ち止まり目をこらすと、千賀の視界は瞬く間にカラフルになった。赤、青、黄色、ピンク、緑、オレンジ……たくさんのいろがその人たちのまわりを舞っていた。

ボールからもかすかにオーラが見える。

千賀の目はきつとなにか秘密があるのだろう。

でなければ、千賀が普通に生活していくことは難しかっただろう。たくさんの色があるということは千賀にとってとても疲れる状況だ

った。なかなか休むことができず、疲れはてたことも何度かあった。しかし千賀は人間だ。いつか慣れはくる。

そして、千賀は諦めることを覚えた。

廊下の向こうから二人の男子生徒が歩いてきた。

千賀は目を疑った。

二人ともオーラが見えないのだ。

「え！嘘っ」

思わず小さく声を出してしまった。

オーラが見えなくなったのかと一瞬思ったが横を見れば野球部のオーラが見えた。

男子生徒の二人組は近づいてきた。それでわかった。

彼らは双子だ。

顔がとても似ている。

二人組は、千賀の横を通るとき、千賀にだけ聞こえるように呟いた。

「オーラが見えないのがそんなにおかしいことか？普通だろ？」

そして小さく笑いやがった。

息が一瞬できなくなった。誰にも言ったことはないことを初対面の二人組は知っていた。オーラが見える。そんな非日常が当たり前

なっていた千賀。この二人もまた、非日常が当たり前な二人だった。

はじめて自分と同じ力を持つ人に会えた。

振り替えるとその二人が廊下を下駄箱にむかって曲がるところだった。

「っあ、まっ」

二人は千賀を嘲笑うかのようにその姿を壁の向こうに消してしまった。

一人残された千賀は淋しさを紛らわすように頷いた。

千賀が二人に再会したのはその3日後だった。

教室で一人ぼーとしていた時のことだ。

「「そんなアホ面してる奴が頭悪く見えるんだよな」」

いきなり聞こえてきた声に一瞬反応が遅れた。

「え？」

「お前だよ」

「やべえ。俺部活行ってくるわ」

見ると、教室の入り口の前にあの二人がいた。

片割れは部活行ってくるわと言った後、教室を出ていった。

それから残された方はしばらくその少年の背中を見送った後、こちらに体を向けた。

「お前、オーラみえるんだろ？」

少年は何の前触れもなくそう言った。

「そうだね。気持ち悪いでしょ」

「別に。俺らのオーラ見えてないんだろ？」

「そうだよ。」

「だったら俺らの方が気持ち悪いじゃねーかよ」

少年は少年なりに千賀をなぐさめてくれたらしい。

「なあ、イツから見えるようになった？」

「そんなのおぼえてないよ。ずーっと昔だったような気もするし、最近だったような気もする」

「なんだよそれは。ハッキリしろよ」

「わからないの。いつもひとよりカラフルな空間で生活していると
なにかがずれてくる。頭がおかしくなってくるの。だから、わすれ
ちゃった」

「そうか……じゃ、もう一つだけ質問いいか？」

「どうぞ」

すると少年は息を大きく吸った。

「何で俺らにはオーラがないんだとおもっ？」

千賀に対する質問というよりただ、助けを求めているように聞こえた。

「それは……わからない。でも、初めて会った」

「初めて……か」

そこで千賀はとても言いことばを思いついた。

「見えない、ない、んじやなくて、あるのに見えないって考えたどうかな？」

「どういうことだ？俺らのオーラは透明だとても言いたいのか？」

千賀は勢いよく首を横に振った。

「ちがうよ、透明の逆だよ」

「逆？」

「そう、逆。カラフルすぎるんだ。この色があふれる世界に溶け込みすぎて、景色と同化してるだけなんだよ。オーラがない人なんていない」

すると少年は笑った。

「お前プラス思考の鏡だな。でも、ありがとう。ちょっとは元気でたよ」

少年ははにかんだ笑顔のまま教室から出て行った。

（後書き）

読んでいただき有り難うございました。
感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0726m/>

オーラの見える教室

2010年12月18日14時24分発行